

C₁-4 治水利水計畫の合理化に關する基礎的研究

○石 原 藤 次 郎
岩 井 重 久

從來我國では河川計畫の基本たるべき水文資料の處理に當つて、余りにも經驗的結果を重視したため、遺憾な点が少くなかつた。我々は幾多の諸外國における研究を参照の上、我國にても數理統計學に基いた調査研究が極めて必要であり、この方針によつて始めて治水利水計畫の合理化が行われ得ることを明かにしたのである。こゝでは確率洪水、確率降雨に基いた計畫高水流量の合理的決定法と治水計畫の經濟的能率化について利根川、千代川なを實例として詳細に説明し、又確率洪水に基いた水力の運營及び開發の合理化について吉野川（近畿）を實例として解説したいと思う。なお觀測水文資料の個數、性質なについて統計學的な考察を加えて小標本理論の重要性を説明し、我々の統計學的な取扱いを我國治水利水計畫の實際にとり入れるに當つて考慮すべき要点を明かにするつもりである。

C₁-5 中部地方の水力發電に就いて

石 川 榮 次 郎

- 〔1〕中部地方の河川水利特性——木曾川、矢作川、天龍川及大井川等の雨量及流況其他に就いて。
〔2〕中部地方の水力發電沿革——特に木曾川に就いて。〔3〕中部地方の既設發電力と包藏水力。
〔4〕中部地方發電力の全國並に關西60サイクル系統内に占める位置に就いて。〔5〕中部地方の電源開發5ヶ年計畫——特に丸山、朝日、瀧越、平岡、内ヶ谷、井川及佐久間水力に就いて。

C₁-6 護 岸 水 制 に つ い て

伊 藤 美 代 次

從來護岸水制については主として緩流河川に用ひられたものが多かつたが急流河川の平水量の多い河川では流失損亡するもの多く大聖牛、杭出水利其の他の工法及附隨して居る護岸工法も維持出來ない状態で渺からず今日の災害の原因となつて居る。著者は之等の工法を検討し不透過工と透過工とを混用して着々最上川の流路を安定せしめ併せて護岸を今後根固に粗朶沈床を用ひたものや法覆の玉石張或は摩掛工を改めて、粗朶沈床上に木工沈床を載せて根固とし法覆として混凝土工を施工するものである。

* 京都大學教授工學博士 * 同 助教授 * * 日本發送電株式會社東海支店長 * * * 最上川下流工事事務所長